

より最終的には Gap 2 への認識があってもこれを Gap 1 で解釈し、対応してゆかざるをえなかったわけである。しかし、地域独自の制約条件、背景の差異等の特性を考慮し、生活感覚により近いところで問題をたててゆくならば Gap 2 そのものの解析が必要とされるわけで、それが“まちづくり”の大きな流れとなっている。

しかし、その具体的展開の場面では、まだまだ試行錯誤が積み重ねられなければならないであろう。もし、“まちづくり”の過程が具体的な成果を

生み出しえないとしても、その一連の問題解決過程で蓄積された情報は DSS として体系的に整備されてゆくならば、それは重要な財産であり、次の“まちづくり”へつらなってゆくものとなることはまちがいない。また、DSS といっても現在はその実体はまだ未完成なものであり、DSS の手法自体ももっと改良されてゆかねばならないし、ニューメディア等が普及してゆけば、これにともない DSS の構造自体ももっと大きく変化してゆくであろう。

特集に当って

土方 正夫

近年さまざまなところで“まちづくり”、“むらづくり”が行なわれ、数多くの事例が蓄積され、それぞれに成果があがっている。そして、この流れは単なる一過性の流行現象として片づけるわけにはいかない大きな時代的潮流をその背景にかかえているように見うけられる。

それぞれの事例は固有のキーワードをもっているが、その共通項を抽出してみると、“生活環境”“地域特性”“自律”という言葉が浮かびあがってくる。

生活環境要素にかかわる需要と供給のそれぞれの主体を考えると、明確なようであってそれほど明確ではない。従来これらの問題に対しては“公”と“私”という観点から問題がとらえられていたが、次第に“公”と“私”のあいだにある“協”または“共”の部分が強く意識され、この部分に対し“私”の側から接近してゆこうというのが“まちづくり”の大きな底流であるといえるであろう。

“公”の側からのアプローチでは、生活環境を規定している諸要素の関係性にもとづくきめ細かな特性は吸収できず、いわゆる“らしさ”という言葉に象徴される地域の個性は失われてしまう。

それぞれの生活環境を再度見直して、みずからの手で改善すべきところは改善し、自律可能な具体的プログラムを形成してゆく過程が、“まちづくり”“むらづ

くり”そのものである。

この課題はシステム分析を必要とし、OR の源流である問題解決型アプローチが必要とされ、さらにデザインの問題までを含めた総合的問題解決過程であり、OR ワーカーの参加が要請される問題である。

本特集では“まちづくり”“むらづくり”に対し、都市計画、環境計画、都市工学、システム科学、情報科学のそれぞれの立場から研究を進め、あるいは実践に参加し、貴重な現場体験をおもちの諸氏に寄稿していただいた。

小岩氏には、“まちづくり”“むらづくり”が、わが国だけにとどまらず世界的潮流であるという視点に立って世界の動向をレポートしていただいた。

佐藤氏には都市計画研究者の立場から、都市をつくるとは現代においてどのようなことなのかという点を事例をまじえ報告していただいた。

齊木氏には、日常的にはなかなかふれることのできない山村の“むらづくり”についてレポートしていただいたが、これは現在進行中の事例でもあり、現場の香り高いレポートである。

長谷川氏のレポートは“まちづくり”“むらづくり”の基本問題である地域の基礎単位、あるいは計画単位をどのように定めるべきかという問題に対する具体的方法の試みであるが、“まちづくり”が展開してゆくと必ず一度は行きあたる問題である圏域設定を扱っていただいた。

今回の特集では“まち”と“むら”の諸相をレポートし、OR サイドからはこれらの問題にどのようにおつきあいできるのか、一考していただければと思う。